

真木悠介（見田宗介）『時間の比較社会学』1981 年

1、著者について

①略歴

- ・1937 年東京生まれ、1960 年東京大学文学部社会学科を卒業、東京大学大学院社会科学研究科に進学、東京大学教養学部教員・助教授・教授を経て、1998 年から共立女子大学教授を務める。

②基本的な視点

- ・マルクス、大衆文化研究、社会心理学、比較社会学、コミュニオン論など様々な視点を組み合わせながら近代・現代日本の社会構造とひとびとの心情、その関係性を研究する。
- ・父の見田石介（甘粕石介 1906－1975）はヘーゲル研究者、マルクス主義哲学者。父の直接の影響は定かではないが、「疎外」「止揚」「物象化」などの応用、ある現象を関係性のなかで見ていく点、価値の両義性を見ていく点、近代に批判的でありながら近代そのものを否定せずにのりこえようとする点、観念のみにとどまらず実践に重きを置く点などに影響が見られる。
- ・思想の科学研究会会員。「方法としてのプログマティズム」を掲げた鶴見俊輔を筆頭として 1946 年から 96 年まで刊行されてきた雑誌『思想の科学』の中心テーマ、「ひとびとの哲学」の研究（庶民列伝づくり、生活記録運動、身上相談分析、大衆芸術研究など）が与えた影響。身上相談研究・流行歌研究・ベストセラー研究などに結実。
- ・著者の言う「社会心理学」→数量的データと質的データの統合。「心情」＝社会意識＝「ある社会集団の成員に共有されている意識」。ただし社会意識は個人意識の単なる総和とは異なる。「歴史的な社会の総体性を把握するということ」と「人間のこころの深奥を理解すること」。
「歴史というものを、私自身もそこに参与する無数の無名の人びとの一回かぎりの人生の、確執や幻想や打算や愛や献身のひしめく総体としてとらえなおすこと」（『近代日本の心情の歴史』まえがき）
- ・1973 年に初のインド旅行。1974 年から 75 年までメキシコ大学院大学のアジアアフリカ研究センターに教授として留学する。近代社会を相対化する視点を持つ契機となる？
- ・比較社会学→「知性の最もすぐれた資質は、みずからの限界を知りうることである。そして〈近代精神〉の最もすぐれた可能性もまた、みずからの限界をみずからの力において対自化し、みずからをのりこえてゆく能力に他ならない。比較社会学、という方法がわれわれにとって意味があるのは、それがこのような、近代世界の自己相対化——自己超出の運動の、一環を担いいうるからである（『時間の比較社会学』あとがき）
- ・コミュニオン論→欲望を規範により束縛する〈共同体〉、人間たちの欲望の相克性がいったん解放された状態である〈市民社会〉より高次の状態、欲望の相乗性（相手にとって喜びであるということが、それ自体、自己にとって喜びであるという関係）が体现された状態。（1986『現代社会批判／〈市民社会〉の彼方へ』作品社）

③主著とそれらの要点 ※真木悠介の名前で執筆

1965『現代日本の精神構造』弘文堂

- ・1963「現代における不幸の諸類型」、『思想の科学』に掲載された「ベストセラーの戦後史」な

ど一種の文化研究なども収めた初期の論文集。高度成長という「幸福」に直面する一方でひとびとが感じている「不幸」が主なモチーフ。

- ・ 62 年の読売新聞に掲載された 304 件の身上相談の投書から 12 件の事例を抽出、要因関連図を作成・分析。人間の自己疎外、人間が「問題」を「問題」と表現している場としての身上相談。

1966『価値意識の理論 欲望と道德の社会学』弘文堂

1967『近代日本の心情の歴史—流行歌の社会心理史』講談社

- ・ 16 歳ビスケツト工場のアルバイトで同年輩の工員たちがくちずさんでいた歌。「若者よ、恋をしろ、お金や身分がなくても、恋すりゃ希望がわいてくる、この世のパラダイス」。歌詞の明るさと歌声の重さ。
- ・ 空間の差異の刻印である民謡にたいする、時間の差異の刻印としての流行歌の社会心理考。時代の心情を映し出す鏡としての流行歌（明治初年から 1960 年代までの 451 曲）をいくつかの心情のカテゴリー（孤独・郷愁・無常感など）に分類してグラフを作成、数量的・質的な分析。

1968『現代の青年像』講談社新書

- ・ 中央調査社の協力で実施された「全国青壮年調査（対象者は 15 歳から 44 歳の約 4000 人、面接調査員は約 900 人、大切なもの・悩んでいること・腹が立つことなどの質問）」の数量的統計分析（年齢別・職業別・性差などによる傾向の違い）と、自由解答欄の質的分析。
- ・ 革新政党の支持とレジャー享楽型の有意性。賃金が低い「労働者」としての不満よりも物価が高い「消費者」としての不満。大切なもの一位は群を抜いて健康。

「健康が何より大切だと思う。いちばんもつになるのだから」という自由回答に示されるように「大切なもの」は人生の花である。事実の世界では花は根っこに支えられている。しかし、美しい花を咲かせるということがないならば根っこの意味は空しいのだから、価値の世界では、花が根を支えているのである。(p80)

1970『現代の生きがい—変わる日本人の人生観』日本経済新聞社

- ・ 精神のパンとしての〈生きがい〉は、絶対的な価値を与えてくれる神／共同体なき時代、生存そのものから解放された時代になり初めて問われるようになる。
- ・ 『時間の比較社会学』の主要モチーフ、近代合理性の帰結としての〈死の恐怖〉や「未来に向けた現在の生の道具化」がすでに問題提起されている。

今日という日を、未来のある目的のための単なる手段と考えると、この現在の生そのもののなかに喜びを見出さないものは、ついにその全人生をむなしく過してしまうだろう。人生はいつも、今日という日の連続であって、明日という日は永遠に来ないのだから(p181)

- ・ ただし〈死の恐怖〉をのりこえる方法は、「あたかも蛇が自分のしっぽを食うようなかたち」で自己完結的な「幸福」とは異なる。

1971『現代日本の心情と論理』筑摩書房

- ・ 1965「新しい望郷の歌」、「現代高校生の職業観」「失われた言葉を求めて」などを収めた 65 年以降の論文集。60 年代の高度成長期に生きるひとびとの「疎外」と「止揚」が主なテーマ。
- ・ 大正期の全家族心中の勃発と高度成長期の出稼ぎ。農村から都会への移動による家郷からの解離に加えて、自然村秩序と大家族制の解体により家郷そのものの機能が喪失することで、ひとびとは過去の家郷から未来の家郷へ「決死の跳躍」を挑まざるをえない。
- ・ 全体的に見ると、流行歌・ベストセラー・高校生やサラリーマンへのインタビュー・手記など、

広義の文化研究という姿勢そのものは変わらないが、統計的・数量的な分析があまりなく、個々の語りのリアリティに時代の心情の発露を見出す質的な分析の比重が大きくなる。

1971『人間解放の理論のために』筑摩書房

1977『現代社会の存立構造』筑摩書房

1977『現代社会の社会意識』弘文堂

- ・1973「まなざしの地獄—現代社会の実存構造—」などを所収。著者が重きを置いてきた質的な分析のひとつの結晶といえる。「統計的事実の実存的意味」
- ・網走の極貧の家庭に生まれ、青森から集団就職で上京した後に連続射殺事件(1968—69)を起こしたN・N(永山則夫、1949—97)の心情から社会構造を照射する。家郷から離れて都市で尽きなく生きようとする主体と、その主体をたんに「金の卵」・「新鮮な労働力」・労働力商品とする限りで歓迎する都市。出生・学歴などの過去を本人の「現在」「未来」として同定する他者たちのまなざしと実践。服装・容姿・持ち物・肩書きなどの表相性において本人の総体を規定する他者たちのまなざしと実践。「階級構造と象徴的暴力」？

貧困とはたんに生活の物質的な水準の問題ではない。それはそれぞれの具体的な社会の中で、人びとの誇りを挫き未来を解体し、「考える精神」を奪い、生活のスタイルのすみずみを「貧乏くさく」刻印し、人と人との関係を解体し去り、感情を涸渇せしめて、人の存在そのものを一つの欠如として指定する、そのようなある情況の総体性である。(p37)

- ・19歳の逮捕時の所持品はピストルの他、ローレックスの腕時計、ロンソンのライター、鉄製クシ、明治学院商学部の学生証など。「望むどおりに理解されることの不可能」
…彼はまさしくこのようにして、その嫌悪する都市の姿に似せておのれを整容してしまう。他者たちの視線を逆に操作しようとする主体性の企図をとおして、いつしかみずからを、都市の要求する様々な衣裳をこてこてと身にまとった、奇妙なピエロとして成形する。N・Nの話ではない。われわれのことだ。(p43)

※1977『気流のなる音—交響するコミュニケーション』筑摩書房

- ・「気流のなる音」とは、文明化されて変容した近代人の感覚ではとらえることのできないものの象徴。メキシコのヤキ族、老インディオとの出会いにより近代的自我を揺さぶられたアメリカの文化人類学者、カルロス・カスタネダによる著作を独自に読解。〈自明性の罠からの開放〉
- ・「理解することは変わること」、感覚の変容、近代のオルタナティブの模索など、ヒッピームーブメント・ドラッグカルチャーとの親和性。ただしLSDなど薬物の使用は、感覚の水準にとどまり「すること」の水準に達しないかぎりでは対症療法にすぎない。〈コミュニケーション論を問題意識とし、文化人類学・民俗学を素材とする、比較社会学〉の出発点。

1979『青春朱夏白秋玄冬—時の彩り・88章』人文書院

※1981『時間の比較社会学』岩波書店

- ・著者の言う原初的な問いのうちの一つ目、ニヒリズム・〈死の恐怖〉からの解放のための仕事とされている。「〈永遠の生〉に対するやむことのない願望をどう処理したらいいのかという問題」

1984『宮沢賢治—存在の祭りの中へ』岩波書店

- ・宮沢賢治の著作に、自我という罪とその超克(『よだかの星』一瞬の生命の燃焼としての死が永遠の青い美しい星になる)、時空の限定性と開放性は矛盾しないこと(『銀河鉄道の夜』『青森挽歌』汽車の中のリンゴとリンゴの中を走る汽車)などのモチーフを見出し、コミュニケーション論の世

界観として描く試み？

1987『白いお城と花咲く野原—現代日本の思想の全景』朝日新聞社

- ・85年1月から翌年12月まで朝日新聞に掲載された論壇時評集。

※1994『旅のノートから』岩波書店

- ・73年以後のインド旅行やメキシコ留学の際のノート。グアテマラの市場、マヤのおばさんとの駆け引きで、自分が時間を「費やす」という近代的感觉に侵されていることにふと気づく（トニカパンの時間）。

1995『現代日本の感覚と思想』講談社学術文庫

- ・プレ高度成長期・高度成長期・ポスト高度成長期を、「現在」の対義語を用いて「理想」の時代、「夢」の時代、「虚構」の時代と名付ける。「虚構」の時代の消費社会を道徳的に批判する立場はとらない。

1996『現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来』岩波新書

- ・「貨幣への疎外」というコンセプト。「貧困は、金銭をもたないことにあるのではない。金銭を必要とする生活の形式の中で、金銭をもたないことにある。(p104)」→「くたばれ GNP」とまでは言わないが…。「時間への疎外」に応用？「時間の圧力は、時間が足りないことそのものに由来するのではない。秒や分という数量的な単位としての時間を必要とする生活の形式の中で、時間が足りないことにある。」
- ・現代の情報化・消費化社会を「それでもゆたかな社会」と位置づけ、環境問題・資源問題・南北問題などを解決するためには、情報や消費を禁圧するのではなく、大衆消費社会の外部収奪的な性格を転回する必要があると説くように、あくまで近代そのものを否定しない。「それぞれの欲求が相克的ではなく相乗的な社会の構想」…？

※2001『自我の起源—愛とエゴイズムの動物社会学』岩波書店

- ・著者の言う原初的な問いの二つ目、エゴイズムからの解放のための仕事とされるが…？「〈自分〉という存在が世界の内で、唯一かけがえのないものとして現象してしまうことの理不尽をどう処理したらいいのか、どう思い定めておいたらいいのかという問題」

2006『社会学入門—人間と社会の未来』岩波新書

- ・岩波書店から定本著作集が出版される予定。

▼このように見ると、近代社会における人間の疎外という基本的な問題意識は一貫して変わらないが、73年以後の旅や留学を境にして著者の姿勢に大きな転換があるように思える。前期においては、地方差や階級構造を踏まえた広義の文化研究により、人びとのリアリティから近代日本の社会構造と社会意識が描写されている。後期においては、近代社会の相対化を経て新しい共同性を構築する、というように良くも悪くも研究対象が拡散し、抽象的な理論構築が先行してしまっているようにも思う。「内側から見えた日本社会のリアリティ」から「外側から見えた近代社会の非自明性」へ。そのような意味で、『時間の比較社会学』は近代日本そのものの分析や地方差や階層差を踏まえた分析という視点はないが、著者の根源的な問題意識と、異国体験が幸福なマッチングを果たし、理論がうわすべりしないだけの新鮮な違和感がキープされていた時期に書かれた作品であるといえる。

2、本書の内容

序章 時間意識と社会構造

○問題意識と方法論、著者の視点など

- ・私の死ゆえに私の生はむなしいという〈死の恐怖〉(具体的なさしせまった死への恐怖ではなく、自己の消滅の不可避性という観念がもたらす恐怖)。「この世の生の時間は一瞬にすぎないということ、死の状態は、それがいかなる性質のものであるにせよ、永遠であるということ、これは疑う余地がない……。 (17c パスカル)」
- ・人類の死滅ゆえに人間の歴史はむなしいという〈時間のニヒリズム〉。「人類は消滅するであろうなどとわれわれが断言するのを、なにものといえども許しません。人おのおのは死にますが、人類は死ぬべきものでないことをわれわれは知っています。(20c ボーヴォワール)」
- ・近代合理性の矛盾。「意味づける主体の存続を時間的に無限のものとして幻想しないかぎり、自己を虚無から救い出すことのできない構造をもっているということ(p3)」
- ・「未来に向けた現在の生的手段化 instrumentalism」を問題化。
- ・これら近代人の精神の病の根源には、①帰無してゆく不可逆性としての時間了解、②抽象的に無限化されてゆく時間関心のふたつがある。だがこれらは絶対的なものではなく近代社会に固有な基準のとり方に過ぎない。比較社会学の手法で、原始共同体・ヘレニズム・ヘブライズム・近代社会という四つの理念型を想定して、自明とされる近代社会の時間意識を相対化する。
- ・哲学者、文学者、宗教家、物理学者の仕事とされる時間の問題を社会科学として取り上げる意味は、時間の感覚を社会の形態の問題(自然と人間、共同態と都市、市場と貨幣など)と結びつけて考える点にある。
- ・解決手段として、理性を鈍らせること、感覚的な麻酔、強迫的な信仰、日常生活での気晴らしなどをとらない。社会との関係性のなかで「問題を対自化し自己解放の道を照らしだすこと」が目指される。観念から実践へ。

○一つ目の軸、自然からの人間の自立と疎外、「離陸」

- ・北アメリカのホピ族(言語学者ベンジャミン・ウォーフ 1897-1941)
ホピ族の言語では過去が現在と区別されない。おなじようなくりかえしは浪費されるのではなく、蓄積されるものであり、昨日や今日や明日というそれぞれの日は別の日ではなく、同じ日がくりかえし再現されるという感覚。人間と自然との連続性の感覚。
- ・原初的な時間感覚としての〈振動する時間〉。時間は「繰り返し現われる対立の不連続」という概念。(人類学者エドモンド・リーチ 1910-1989『人類学再考』)
- ・メキシコのオトミ族。自然の時間から剥離していく原初的な感懐。「川は流れて／流れてやまぬ／風は流れて／流れてやまぬ／人生は流れて／かえらない」
- ・オーストラリア中部の原住民の「チューリング」。先祖の生まれ変わりであることを物的に確証するすが、「物的に現在化された過去」(レヴィ=ストロース『野生の思考』1962)
- ・自然的な景観もチューリングと同じように、「歴史性を内在する物理的な宇宙」である。アメリカ原住民の世界の白人による解体の歴史の中で、白人によるかれらの略奪や殺傷にたいして以上に、自然の破壊や土地からの追放にたいして、かれらが深い怒りと絶望を示したという事実。(民俗学者ストレーロウ 1908-1978)

「白人は原住民を殺害することでその生を奪うけれども、その土地＝自然を解体し接收することで、たんにその生のみならずその死をも奪うのである(p26)」

- ・自然からの人間の超越→①帰無してゆく不可逆性としての時間感覚、という一つの軸

○二つ目の軸、共同態からの個の自立と疎外（ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ）

- ・伝統的なアフリカ人の観念には、自分自身が経験することのない抽象的な未来という観念が存在しない。現在の延長として、具体的な事物や活動と関連付けられる未来はある。（ケニアのカムバ族出身のムビティ『アフリカの宗教と哲学』1969）

- ・スーダンのヌアー族、ウガンダのアンコーレ族の牛時計（エヴァンズ＝プリチャード『ヌアー族』1940）。古代日本の潮時計。アンダマン島民の花ごよみ。

牛時計（牛舎から牛を連れ出す時間、搾乳の時間「乳しぼりの時間に帰ってくるだろう」など）の通用範囲は、特定の風土的条件の中で、その牛を生業の中心とする共同体の範囲に限られる。共同体の相互依存、交易関係の深化につれて、個別の動植物や生活の具体性から離れて、抽象的な尺度としての「時間」、貨幣と同様に物象化された「時間」を必要とするようになる。究極的には人類共通に具体的なものである「大地」、地球の自転速度に依存する一昼夜という単位と、それを24・60など約数の豊富な整数により分割した単位が標準となる。

〈生きられる共時性〉から〈知られる共時制〉へ。

- ・共同性からの個の超越→②抽象的に無限化されてゆく時間感覚、という二つ目の軸
- ・近代文明はこれら二つの図式の統合の帰結として存立しているという仮説。

第一章 原始共同体の時間意識

この章では、序章で紹介された、自然性からも共同性からも超越していない社会と振幅する時間を持つ対照集団としての原始共同体をさらに詳しく描いている。

- ・レヴィ＝ストロースのトーテミズム論、エリアーデの〈聖なる時間〉論、ムビティの〈ササとザマニ〉論。時間のことばで語られる永遠。黒と黄の遮断機の彩色のような交替する時間ではない。また二本のレールのような単純な平行でもなくて、交互に顕在的であり潜在的であるようなかたちで、より合わさっているという意味での並行な時間。
- ・原始人にとってはくりかえすものが図であり一回的なものは地にすぎないが、近代人にとっては逆である（「私」の一回かぎりの生が主題であり世界が背景となるような社会）。
- ・ヌアー族やカチン族には「時間」に相当する表現法がない。「時間を計る」まえに「計るべき時間」は存在しない。
- ・ピグミーは生まれた年も年齢も知らないし、年月をかぞえない。「数式的な日付け」もない。
- ・スーダンのディンカ族の雨乞いは、雨季に近づく時にだけおこなわれる。自然を支配するのではなく、自然のリズムに乗る。

「カムバ族がもしその文化を中心において、異族としての近代文明を記述するならば、かれらは本来非現実的なもの、つまりはるかな子孫のこととか百年もあとの歴史の記述を、客体視された「時間」の延長線上に幻視して思いわずらう奇妙に神秘主義的な文明、無限につづく「時間」の実在性というフェティシズムにとりつかれた集団として語るだろう(p77)」

- ・近代化によりアフリカに輸入される「未来への希望・渴望・期待」。ただし未来志向には「アフ

リカ統一、人種差別撤廃」などの目標を現在と関連付けることにより、人々がそれを「現実的なもの」と認識することを可能にするという解放的な側面もある。

「アフリカが踊っている夜を、ヨーロッパやアジアの「真空地帯」の勤勉な農民や牧畜民たちは、労働の明日にそなえて眠りながら〈近代〉をはぐくんでいた(p97)」

第二章 古代日本の時間意識

この章で古代日本は四つの理念型を説明するものとしては扱われていないが、ひとつのケーススタディとして、自然性からの超越を経て共同性から超越するという二段階に変容する時間意識の歴史とその過渡期を描いている。

①日本における原始共同体の時間意識

- ・昼と夜という異質な二つの世界を括って「一日」とする観念はない。季節や生死も同様。
- ・太陽・ヒ、月・ツキ、稲の稔り・トシというように、事象から枠組みがつくられたのであり、その逆ではない。現在の手段化の発芽としての農耕。秋の収穫のために行われる春の予祝儀礼。

②日本における不可逆的な時間感覚の創出、自然性からの超越

- ・大和朝廷の父祖の地の共同体から離れた人為の都である近江京の設立。藤原京・平城京・平安京とつづく遷都。
- ・古代国家における不可逆的な時間意識を悲劇的・不吉なものとして感受した表現者、自然性からの超越と共同性への内在という過渡的な存在として万葉集の柿本人麻呂のうたを分析。万葉集においては経験の具象性への没入が表現されている。

③日本における抽象的な時間の創出、共同性からの超越

- ・律令国家による時空間の合理化。620 年頃、大化改新による年号の制定。660 年頃、天智天皇による漏刻（水時計）の造営、鐘や鼓の音で時を知らせる習慣により、昼と夜という異質な両世界が初めて貫かれた。690 年頃、暦制の整備。710 年頃、古事記や日本書紀といった年代記の編纂。遷都前後の貨幣経済の浸透。天皇を指す言葉である「ひじり」＝「日を領る」＝「時を支配する者」。
- ・万葉集の編集者の大伴家持、「春に愁える人」。古今和歌集の時代になると観念の時節の方から事象を枠組みに沿って表現する方向に変わる、「春は来にけり」。在原業平や小野小町のうたには、世間の心情への共感から個々の身体的・性愛的な関心へ、また老いや死の恐怖へという変化が見られる。
- ・ただし近代的な時間意識を「自己規律」として民衆が内面化するに至るには近代国家をまつことになる。

第三章 時間意識の四つの形態

反復的な時間を基礎とする原始共同体、直線的な時間を基礎とする近代社会に加えて、自然性から超越した社会＝線分的な時間としてヘブライズムの世界、共同性から超越した社会＝円環的な時間としてヘレニズムの世界が考察されている。(p195 の図を参照)

○ヘレニズム—数量性としての時間

- ・円環する時間のイメージの原点はゲマインシャフト的な秩序が揺らぐ前 6 世紀、ミレトス学派のアナクシマン드로スの思想に見られる。〈万物は数である〉というピュタゴラス学派の根本テ

一ゼ。輪廻転生を説くオルフェウス教の影響。イオニアは貨幣の流通の発祥の地。「人は金なり」「富には限りがない」。法による支配と「金権政」を採ったソロンの改革の時代は、土地貴族から新興商人階級への権力の移行期であり、ゲゼルシャフト的な秩序の形成期であった。

○ヘブライズム—不可逆性としての時間

- ・初期の回帰的な終末論から後期ユダヤ教の黙示文学の「真の終末論」へ、初めと終わりが異ならねばならないという意味での時間の直線性・不可逆性は、ユダヤ民族の徹底的な受難と絶望の時期、未来に現在の生の意味を見出さざるをえない状況で救済を可能なものとする唯一の時間形式であった。

第四章 近代社会の時間意識—(1)時間への疎外

この章では近代化による神から人間へ／共同態から集合態へという変化が引き起こした、絶えず新しく自己を再定位していかななくてはならない近代人の自我の揺らぎと、その解決手段としての共同幻想が自己幻想へ変化していく過程が考察対象とされている。

- ・近代的個人の誕生＝時間と自我との双対的な崩壊感覚。16c カルヴァンの「われ信ず」。17c デカルトの「われ思う」。18c マブリーの「われ感ず」。
- ・ブルースト的な「回想」における〈過去〉。神の代位としての回想＝記憶が近代人の自我の回復に寄与するのは、現在の生の意味の喪失を埋めるものとして「過去」を見出すからである。近代人にとって〈真の楽園は一度失われた楽園〉でなければならない。
- ・サルトル的な「投企」における〈未来〉。現在の生の欠落を「未来」に託すという方向。
- ・いずれにせよ、近代人は「今、ここにある自分」の不確かさから解放されるために過去／未来を再構成せざるをえない。

近代的自我は一方において、現にある関係からの飛翔を求めつづけると同時に、他方において足許のくずれ去るようなリアリティの喪失感につきまといわれている。それは持続するたしかな時間にあこがれながら、現に持続する時間の粘着力からの切断を求めている。近代的自我たちにとって、思い出の中の他者だけが美しく、あるいは希望の中の他者だけが美しいのは、近代的自我のアイデンティティのこの矛盾にもとづいている。(p252)

- ・ビエンヌ湖畔に佇ずみ近代人の悩みとは無縁に見えるルソーが孤独なのはなぜ？→近代社会は自然からの離陸を前提としているから、自然との同化による現在そのものの充足の試みは、現実の社会関係からの排除を経てしか達成できない。「貨幣への疎外」がまずあり「貨幣からの疎外」がくることとパラレル。近代社会の中で自給自足を目指すことの不可能性と孤独)
- ・キリスト教出自の近代社会と比べて絶望感が薄いという点で日本の近代化の「底の浅さ」と「おくれ」を指摘。

第五章 近代社会の時間意識—(2)時間の物象化

共同体間の交易や分業を原動力とする近代社会は、物象化された貨幣／時間を必要とする。

- ・「標準化された計量可能な時間」を象徴する定量音符の整備(15c～17c)。多声音楽や対位法の発明。合唱やオーケストラを可能にするもの。
- ・複雑精緻な対位法のシステムとしての近代社会（工場や企業や官庁、証券取引市場、都市交通、学校、放送、テレビ）は、共同体間の相互依存や分業の促進が、通約可能な尺度である貨幣を

必要とするのと同様に、共通の計量可能な時間・インデックスを必要とする。出勤や業務開始や休憩や待ち合わせや打ち合わせなど、いわば近代社会という名のオーケストラを可能にするもの。

- ・時間の客体化そのものはひとつの解放であり批判されるべきではないが…

「貨幣がそうであることと同じに、近代市民社会における個人にたいする「時間の圧力」「時間の支配力」とはじつは、彼の目的性に無関心な他者たちすべてのブラウン運動の合成されたベクトルの強圧力に他ならない。(p279)」→社会関係の物象化としての「時間」

「月が出ると全アフリカが踊る」あいだは、アフリカの近代化は完成しないだろう。「虹を見ると踊る」心をいつももちつづけていれば、近代社会のビジネスマンやビュロクラットはつとまらないのだ。近代化のいわば、人間類型的な代償。近代社会のシステムの要求する外的な共時制へのパンクチュアリティは、内的な共時性のいったんの自己外化を前提として要求する。(p284)

- ・富岡製糸工場など近代化初期に労働者が時間どおりに出勤する難しさ。仕事中に仲間と話をしない不自然さ。
- ・人生のいわば〈時間的なゲシュタルト化〉／生活のスケジュール化と〈現在からの疎外〉。
ビジネス business とは文字どおり忙しさ busyness、時間とのたたかいを指す。現代の支配者たちを支配するものとしての時間。「われわれみんなが時間の奴隷と化している」(R・マッケンジー『時間を管理する技術』)。
- ・商品の使用価値を捨象して、交換価値を決定する基準としての「社会的必要労働時間」の観念が、〈生きられる時〉をあたかも等価物のある「時間」として析出する。このように物象化された等価形態としての貨幣／時間の出現により、人間の関心と欲望は抽象的に無限化される。
時間を費やす、時間をかせぐ、時間を無駄にする、時間を浪費する、時間を節約する。「時は金なり」(ベンジャミン・フランクリン)
「われわれがみずからの生きる世界を構成している事物—自然や他者たちとの交流のうちに生きられる時のおおのに、「等価物のない」固有の絶対性を感じ取る能力を喪ったとき、われわれの時間関心は、使用価値でなく交換価値それ自体に向けられた関心と同様に、抽象的に無限化される。それはわれわれの人生が、完結して充足しうる構造を喪うということだ。(p306)」
- ・ただし、未来に向かう意識が〈時間のニヒリズム〉を導くのは必然ではない。

結章 ニヒリズムからの解放

- ・それでは近代化の積極的な側面を捨てることなくニヒリズムから解放されるためには？
「現在が未来によって豊饒化されることはあっても、手段化されることのない時間、開かれた未来についての明晰な認識はあっても、そのことによって人生と歴史をむなしいと感ずることのない時間の感覚と、それを支える現在の生のかたちを追求しなければならぬ。(p319)」
- ・「現在の生の手手段化 instrumentalism」を乗り越える「現時充足的 consummatory」な生の追求。

3、本書の評価・批判

- ・比較社会学という両刃の剣

本書の比較社会学は社会間比較が中心であり時空間を越える軽やかさとダイナミックさが魅力となっていると思うが、その反面ある社会をマスとして考えざるをえないので、社会内の階層

間・地域間・世代間比較などの視点が乏しい。

例えば、近代的な時間意識から〈死の恐怖〉を思い煩うのは「エリート」のみで、「一般人」は「今が楽しければそれでいい」のでは？資源が少ない人ほど「その日暮らし」をせざるをえない。「現在への疎外」という問題は？

- ・現代からすれば著者の問題意識は成長期ならではのもの？

本書は近代社会＝管理社会の中の「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神＝よりよき死のための生の道具化」批判、あるいは近代批判という色合いが強いが、成長期を終えた現代では「よりよき未来のために現在が道具化されている」という意識を持ちにくい。

- ・これらを総合すると、著者の言う「現時充足的 consummatory」な生の追求による〈ニヒリズムからの解放〉が、「現在への疎外」「刹那主義」「私生活主義」に転化してしまう可能性を指摘できるが…

「〈今〉は過去から未来への全因果系列の中にあり、〈自分〉は他者との、無数の社会的関係に組み込まれている。〈今、ここにある自分〉はたしかに幸福の究極的な拠点であるが、それ自体として抽象的にとりあげられた瞬間にいつさいの意味を失い、もう一つのニヒリズムの深淵におちこむ。…〈現在〉は現在をこえるもの、〈未来〉にある目的ないし結果との関連においてはじめて意義づけられる。…同様にまた、〈自我〉は自我をこえるもの——〈社会〉との関連においてはじめて意義づけられる。（『価値意識の理論』p138）」

▼このように著者は現在志向そのものを肯定しているわけではない。同様に未来志向そのものを否定しているわけでもない。それらが自己目的化するとき、現在と未来、自己と社会は分裂された疎外の形態となる。未来の自己目的化が「生の手手段化・道具化 instrumentalism」であり、現在の自己目的化が「現在への疎外」「刹那主義」「私生活主義」であり、両者は同じコインの表裏と捉えられる。そのため著者の言う「現時充足的 consummatory」な生の追求による〈ニヒリズムからの解放〉は、その両者を止揚するものとして考えられる。その点を踏まえてみると、本書には単なる近代批判に留まらない、右肩上がりの経済成長を望めない現代にも響くものがあると思う。

参考文献

ウィキペディア（見田宗介・真木悠介・比較社会学）

真木悠介 1981『時間の比較社会学』岩波現代文庫

天野正子 1996『「生活者」とはだれか—自立的市民像の系譜』中公新書

1の③の各著作